

ちょう
町
かい
あひ
町
あひ
出
で

大和猿楽「出合の座」

藤原鎌足（かまたり）を祭る談山神社（多武峰Ⅱ桜井市）が、室町時代後期の永正二（一五一五）年に領地の古絵図を作っています。

その古絵図に十市郡膳夫莊（かしわでそう）の一部分として、当地に当たる出合里（であいのさと）が初めて登場しています。出合里の東西入り口に橋と木戸が描かれており、堀で囲まれた環濠集落だったことが分かります。

観世流の祖・観阿弥（かんあみ）の子で能楽を大成した世阿弥（ぜあみ）が、能楽の話題をいろいろ列記した「申楽（さるがく）談議」に大和猿楽の「出合の座」が、この里に本拠を置いて活躍していたと書かれています。能楽・狂言に発展する猿楽（申楽）の一座がこのころ、大和各地に散在して物まね・話芸を中心に盛んな興行活動を展開していました。出合は一時期、大和一円の文化的な拠点となっていたわけです。

古代大道・横大路と中ッ道の交差する出合村が、江戸時代の寛文―元禄年間（一六六一―一七〇三）に膳夫村から独立します。

明治二二年の市町村制施行で香久山村大字となります。昭和三十一年九月に桜井市の大字となったあと翌年一〇月、橿原市に編入され「橿原市出合町」が生まれました。